OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	生老病死の行動科学 : 大阪大学臨床死生学・老年行動学研究分野開設25周年記念号
Author(s)	柏木, 哲夫
Citation	生老病死の行動科学. 2019, 23, p. 5-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73607
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

生老病死の行動科学 2019 年　第 23 巻　pp.5 - 6

寄稿
Contributed Article

生老病死の行動科学
―大阪大学臨床死生学・老年行動学研究分野開設 25 周年記念号―

（淀川キリスト教病院相談役・淀川キリスト教病院名誉ホスピス長・
ホスピス財団理事長・大阪大学名誉教授）柏木 哲夫
（Advisor of Yodogawa Christian Hospital,
Honorable Director of Hospice, Yodogawa Christian Hospital,
President of Japan Hospice Palliative Care Foundation,
Professor Emeritus of Osaka University ）Tetsuo Kashiwagi

＜はじめに＞

私が大阪大学人間科学部に在籍したのは 1993 年から 2003 年までの 10 年間であった。研究室在籍時の様子や現在の活動とのつながりについて記すようにとの要請を受けた。いろいろ考えたが，私の在籍期間の年報のまとめと，私個人の 10 年間の活動のまとめを中心にしようと心に決めた。

＜年報のまとめ＞

53 歳の時に，ホスピスという臨床の場から，大学という教育と研究の場に身を移した。63 歳の定年まで 10 年あるので，一仕事出来るかもしれないと思った。結果的には，半仕事くらいで終わった。もう少し居座ることが出来れば，残りの半仕事ができるかもしれないと思ったが，文字通り定年は定まっているので仕方がなかった。赴任以来の年報をひもといてみるといろんな思い出がよみがえる。

年報にそって，振り返ってみたい。

・大阪大学臨床老年行動学年報 1（1996/3）

第 1 報は 1993 年の赴任後，3 年目に出た。11 の論文が掲載されているが，平井啓助手の「癌告知における”取り入れ“と”投影”の働き」が光っている。

・年報 2（1997/3）

講座充実期を迎え，論文のレベルが向上した。坂口君の悲嘆研究，大橋君の老人の時間意識の論文がいい。

・年報 3（1998/3）

講座がスタートして 5 年目，院生も 10 名（修士 7，博士 3）になった。講座が東館に移り，これまで三つの階にバラバラだった部屋が 1 箇所に集まり，コミュニケーションが良くなった。

・年報 4（1999/4）

巻頭言を見ると，卒業式の日に，学生さんを自宅に招き，そこで卒業証書を手渡していたことがわかる。1998 に朝日社会福祉賞を受けたことが，ややうれしそうに書かれている。

・年報 5（2000/6）

2000 年 4 月に大学院重点化が終わり，大学院の正式の名前は大阪大学大学院人間科学研究科人間行動学講座臨床死生学研究分野となり，院生は 15 名になった。

・年報 6（2001/7，臨床死生学年報と改題）

大学院重点化とともに研究活動が活発になり，共同研究も増え，年報の改題とともに執筆者が 25 名に急増した。

・年報 7（2002/7）

私が最後の巻頭言「10 年間の締めくくり」を書いた。これが少し光っている。

＜１０年間の個人的まとめ＞

2002 年 5 月 29 日，63 歳になった。一年先の 3 月で定年である。アッという間の 10 年間であった。53 歳の時大学の教官にならないかとの話があった。臨床医としての道を考えていたので，53 歳でキャリアを変えるのは人生の誤算（53）ではないかと思った。友人の一人がこれは誤算ではなく，ゴーサイン（53）だと思うと言ってくれた。これがいたく気に入って決断した（もちろんこれだけで決めたわけではない

が）。

10 年間の教官生活は誤算ではなかった。人間科学部にお世話になって本当によかったと思っている。何よりも視野が広がった。医学という狭い専門分野から人間科学という，とてつもなく広い領域で多くの研究者と接することが出来たのは幸せであった。それに講座の中で，いいスタッフと優秀な学生に恵まれた（ごく少数の例外はあったが）。

62 歳の一年間，いろんなことが起こった。少し私的なことも書かせていただく。先ず孫が二人誕生して，私も「オジイチャン」になった。それに学位を二つ（医学博士と人間科学博士）いただいた。留学その他で医学博士の学位をとる機会を逃し，もういいかとも思っていたが，定年 1 年前の区切りにと挑戦した。学位論文を提出する前に英語の試験を受ける必要があった。教務に行って「学位のための英語の件ですが・・・」と言うと，「御苦労様です，今年は先生が出題ですか？」と言われ，気恥ずかしい思いをした。受験者の最年長だったので，教員と間違われたらしい。

本も二冊出版した。「ターミナルケアとホスピス」（大阪大学出版会）と「癒しのユーモア」（三輪書店）である。後者は当時取り組んでいた（？）川柳を土台にした私流のユーモア論である。意外に評判がよく，初版は数か月で売りきれた。この一年を川柳でまとめると「六十二学位二つに孫二人」ということになろうか。

大学での生活も後一年をきった時，幸い，2001 年 10 月に恒藤暁助教授が赴任して下さったので，後は安心して任せられた。当時，講座も院生 15 名，学部生 16 名で，部屋のやり繰りがかなり窮屈になっていた。研究意欲は盛んで，協同研究も進みつつあった。初めての試みで，学外で 1 泊の FAT(Fellowship and Academic Talk)という院生だけの集まりをもち，とても有意義であった。

2003 年 3 月 5 日～8 日に大阪国際会議場で「第 5 回アジア太平洋ホスピス大会」が開かれた。私が会長，恒藤先生が実行委員長で講座の皆さんにも協力していただいて準備を進めた。国内から 1000 名，海外から 300 名の参加者であった。その他，「退官記念論文集」の発行や最終講義の準備など，10 年間の締めくくりに忙しい日々を過ごした。

＜退官記念会の挨拶＞

2003 年 3 月，関係者が開いてくださった退官記念会の時の挨拶を記す。

本日は年度末の御多忙中にもかかわりませず，私の退官記念の会に御出席下さり，ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。淀川キリスト教病院から大阪大学に移りまして，臨床老年行動学講座を開設し，十年間学生の教育と研究に従事できましたことは，皆様方の暖かい御励ましと御支えがあった故と心から感謝致しております。講座の研究活動のまとめとして，退官記念論文要約集・業績集と最終講義の要旨（阪大 Now 十ページ）を御届けいたします。

4 月からは名古屋の金城学院大学人間科学部に移り，臨床ケア学，ホスピス論等を担当する予定です。淀川キリスト教病院ホスピスでの臨床も続けさせていただくことになっております。（その後，学長，学院長になった）。日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団，死の臨床研究会，全国ホスピス・緩和医療ケア病棟連絡協議会，日本心身医学会，日本緩和医療学会等の仕事も今しばらく継続する予定です。これまでのご支援，ご鞭撻に感謝申し上げますとともに，今後とも変わらぬ御厚情をよろしくお願い申し上げます。

本日は誠にありがとうございました。

＜今後に期待すること＞

幸いなことに，研究室には多くの優秀な学生さんが集まっている。研究室を巣だった人たちは社会の様々な分野で活躍している。大学で老人心理学，死生学，悲嘆学，サイコオンコロジー，緩和ケア，などの分野で研究者として活躍している人も増えている。卒業生が卒業後も交わりを継続し，協力しあえる「しくみ」が構築されればいいのにと思う。単なる同窓会ではなく，もう少し「知の協力」と言えるようなものである。研究室と研究室を巣だった者，巣立った者同士の協力で，この分野におけるユニークな働きができればと思う。